

# 令和6年度 学校評価表

品川区立伊藤学園

校長 野口 大和

伊藤学園校区教育協働委員会

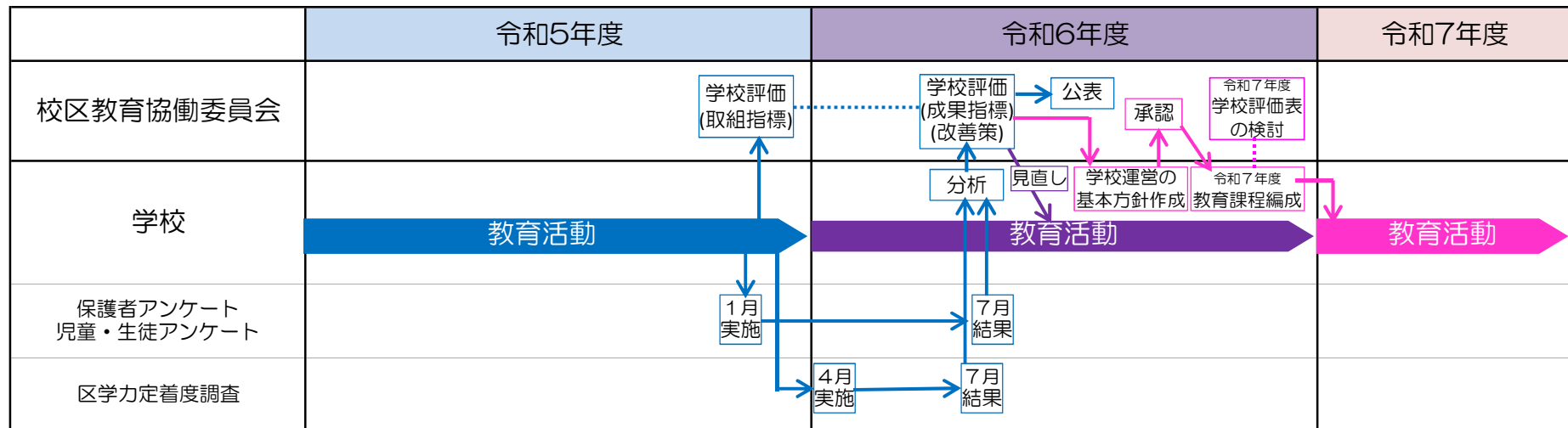
委員長 吉岡 昌紀

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

**学校評価の流れ**（※令和5年度の学校評価が令和6年度および令和7年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		自律した学びのできる児童生徒を育てるための基盤となる「基礎・基本の学力の定着」に努める		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	品川区学力調査で区内平均正答率に同程度以上に達した教科が半数以上の学年数 前期課程 4/5、後期課程 3/3	区の平均正答率に同程度以上に達した教科が半数以上の学年数は、前期課程:3/5、後期課程:3/3だった。(4月実施)	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>探究活動については、教員によって実践力に差が見られる。学校全体で足並みを揃え進められるよう、校内研修を充実させ、探究の質を高めていく必要がある。</li> <li>タブレット端末の活用については、系統的に力をつけていけるよう、今年度立てた計画に沿って指導を積み重ねていく。</li> </ul>
	一貫プランを軸とした教科横断的カリキュラムによる探究活動を実践し、子どもの自律した学びを推進する。	市民科の一貫プランで1年間を通しての探究活動を行うとともに、教科における探究的な学習を行った。年間4回の研究授業を行い、学校全体で自立した学びを推進した。	B	
	タブレット端末を活用した情報活用能力の育成を系統的に推進する。	授業や家庭学習など、タブレット端末を学習に活用する場面を増やすことができた。活用能力については、学年や個人によってまだ差が見られる。	B	
②	教員の授業に対する子どもの「よくわかる」評価 授業アンケート90%以上	児童生徒の授業アンケート94.8%だった。ほとんどの教員が達成できた。全体的に昨年度よりも「よくわかる」の割合が上がっている。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒にとって、よくわかる授業の工夫を継続して行う。</li> <li>研修として確保できる時間が限られているため、学年会や教科部会を効率よく行い、その中で効果的に情報共有できるようにする。</li> </ul>
	校内研修や校内OJTを活かし、子どもの主体的協働的な学習指導を実践する。	校内での研修に加え、校外での研修の成果を各教科部会や学年等で共有することで、校内OJTを推進し、授業改善に務めた。	B	
③	子どもの一人一人の習熟度に合わせた学習支援の充実 授業アンケート満足度80%以上	授業アンケート(5～9年生実施)での満足度は91.2%だった。学年が上がるごとに数値が上がる傾向が見られた。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>更に支援を充実させられるよう、支援員や指導助手、ボランティア等の人材を確保し、配置できる学年や教科を増やす。</li> <li>指導員の確保は引き続きの課題である。地域の方々にも呼びかけ、人員確保に務める。</li> </ul>
	未来塾をはじめとする学習教室や補充学習による基礎・基本の確実な定着を図る。	指導員を増やしたり開催場所の工夫をしたりしながら、未来塾を滞りなく実施することができ、基礎・基本の定着につながっている。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付け、社会に貢献できる児童生徒の育成に努める		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	基本的な生活習慣を身に付けた、自立した子どもの育成 学校評価達成率80%以上	<児童・生徒>1~6年生:95% 7~9年生:97% <保護者>91%	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度と比較して、児童・生徒の結果は変わらず高い達成率である。また、保護者の結果は4%上昇している。</li> <li>・学校だよりや保護者会等で、基本的な生活習慣の定着についての取組や成果を発信して理解を得ていく。</li> </ul>
	礼儀、挨拶、言葉遣いなどを身に付けられるよう、共通理解を図り、徹底して指導する。	登校時の挨拶や身だしなみは、教職員や児童・生徒の中で、意識が高まっている。校内では、2階フロアを中心に「野口校長先生、こんにちは」等、教職員への名前付きの挨拶が広まった。多くの教職員が、挨拶の広がりについて日常生活で実感している。	A	
	話し合い活動や発表活動を充実させた共感と協働を基盤とした学級・学校運営を推進する。	全学年・学級で、タブレット端末を多様な教科で活用して、協働学習を以前より取り入れた。児童・生徒同士が、互いに教え合い、支え合いながら学ぶことで、考える力、話し合う力、協力する力の育成に繋がっている。	A	
②	学校の一員としての自覚と責任、協調性、貢献力の育成 学校評価達成率89%以上	<児童・生徒>1~6年生:94% 7~9年生:96% <保護者>87%	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度と比較して、児童・生徒の結果は変わらず高い達成率である。また、保護者の結果は3%上昇している。</li> <li>・しかし、昨年度と比べて、目標達成率を9%上げたため、達成には至らなかった。</li> <li>・来年度も、児童・生徒の想いを大切に、子ども主体の学校活動を推進していく。</li> </ul>
	当事者意識をもたせた子ども主体の係活動や委員会、学校行事運営の推進	子どもの成長に合わせて、学級の係活動から始まり、学年行事の実行委員や部活動の取組等に子ども主体で関わっている。後期課程では生徒会や委員会を中心に、学校全体の行事運営に参加し、自主性と責任感を育てている。	A	
③	異学年交流を生かした子どもの社会性の育成 学校評価達成率80%以上	<児童・生徒>1~6年生:83% 7~9年生:80% <保護者>91%	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童・生徒と保護者の結果を比較すると、保護者の方が10%程度高く、好意的な回答が多くみられた。</li> <li>・異学年交流を行っている機会は年々増えており、来年度も学校HPに活動の記事をアップし、保護者や地域の方に様子を知ってもらえるようにしていく。</li> </ul>
	異学年交流による学習活動や学校行事を拡大し、社会性の資質・能力を育成する。	低学年の縦割り班活動、前期・後期課程の発表交流、1年生と保育園児の遊び交流、委員会活動・クラブ活動など、様々な機会を設けてきた。これらの活動を通じ、児童・生徒のコミュニケーション能力や協調性が向上している。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		心身ともに健康な児童生徒の育成に努める		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	東京都体力・運動能力調査の全項目(8項目)中50%で、都の平均点を上回る。	握力、上体起こし、長座体前屈、ソフト・ハンドボール投げが都の平均点を下回っていた。その他は高い水準となっていて、合計得点は都平均より上回っている。(50%達成)	A	柔軟性は、体育の授業の準備運動等でも取り入れていく。握力などの筋力は、自分の身体を支える運動を取り入れたりしていく。投力に関してはボール投げの経験が不足しているため、昼休み等の遊びを利用して、楽しみながら改善させていく。
	授業や学校行事、品川トライアルを通じ、運動の楽しさや喜びを味わう活動を促進する。	品川トライアルでは、多くの児童生徒が表彰を受けている。	A	
	授業やクラブ活動、部活動、地域活動等で主体的な運動の習慣化を図る。	全体的に協働的な学びや活動を取り組み、自分たちで動く場面が増えた。	A	
②	学級風土調査における学級生活満足度が区の平均値を上回る 100%	前期課程(前回51.7、今回50.3)、後期課程(前回49.1、今回48.7)共に第1回目の調査より、第2回目の調査結果の値が低くなっている。6年、8年、9年が区の平均値よりも低く、特に6年生に関しては大幅に下回っている。	B	個々にはもちろん、クラス単位や学年単位で、協力して何かをやり遂げ、達成感を味わいさせるような活動を増やしていくことが大切である。皆がポジティブな発言や行動ができ活気ある学校になるよう支援していく。
	児童生徒が自己存在感を実感できる、共感的な人間関係を育成する。	授業や行事等をとおして、協働的な学びの活動を取り組むことによって、相互に認め合うことができた。	B	
③	安全に対する校内危機管理体制の整備と食物アレルギー対応等の研修を年1回実施する。	職員は学校危機管理マニュアルを基に、校内情報共有を図ることができた。アレルギーに関しては年度初め、給食開始前に実施。(エピペン等の研修) 給食では毎日、管理職、担任、栄養士のチェックを行っている。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>安全に関する取り組みに関しては、学校だけでなく、保護者や地域にも情報発信し、チーム学校として取り組んでいく。</li> <li>隔週で行っている情報連絡会、スクールカウンセラーや関係諸機関と密に連携して、対応していく。</li> </ul>
	配慮を要する児童生徒へ、迅速な校内情報共有と外部連携機関との多角的な対応を図る。	2週間に一回の学校情報連絡会で校内情報共有を行い、気になる児童生徒に関しては子ども家庭支援センターや児童相談所等の関係諸機関と連携がとれた。また、校内研修でも配慮を必要とする児童生徒の共有を行った。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		いじめをしない、させない、絶対に許さない児童生徒の自己指導能力の育成に務め、いじめの未然防止・早期発見・迅速かつ適切な対応ができる教職員組織づくりを行う		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	「いじめをしない、させない、絶対に許さない」意識の醸成 学校評価達成率89%以上	<児童・生徒>1～6年生:94% 7～9年生:97% <保護者>88%	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度と比較して、児童・生徒の結果は変わらず高い達成率である。保護者の結果は12%上昇している。</li> <li>・しかし、昨年度と比べて、目標達成率を9%上げたため、達成には至らなかった。</li> <li>・いじめは、どの学年にもどの学級にも起こることを前提として、未然防止・早期解決・再発防止を徹底する。</li> <li>・そのために、令和7年度では、学校いじめ防止基本方針を改定を進めて、さらに共通理解を高めて行動していく。</li> </ul>
	いじめ予防プログラムを活用した学級における良好な人間関係づくりと、支え合う信頼感を生み出す自治的な活動を推進する。	市民科では、全学級で「トリプルチェンジ」の学習を年3回行った。児童・生徒が、いじめの構造を理解すると共に、「やめて・はなれる・たすけ」をキーワードに、生活に生かそうとしている。誰もが安心できる学級風土を目指し、学校全体で取り組んでいる。	A	
	セーフティ教室等によるインターネットトラブルを生まない情報モラル教育を促進する。	セーフティ教室の授業を、4・7学年で7・11月に実施した。今年は、インターネットの安心安全な使い方をテーマに選び、情報モラル教育を進めた。また、保護者の参加も呼びかけて、家庭での情報モラル教育の促進にも繋がった。	B	
②	重大事態発生件数 0件	いじめの重大事態発生件数0件	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後も、学校いじめ対策委員会を中心に組織的に対応し、関係機関と連携して対応を進めていく。</li> <li>・重大事態の定義を校内で共通理解し、いじめ発見から対応までのフローを、誰もが判断できるように分かりやすくまとめる。</li> </ul>
	学校情報連絡会を学校いじめ対策組織として位置付け、毎月2回開催する。	学校いじめ対策組織として、学校情報連絡会を計画通り毎月2回実施した。また、関係機関の方にも参加してもらい、いじめ・不登校・事故やケガ等、児童・生徒の実態を把握して、未然防止と早期解決への対応策を共有した。	A	
③	教育相談体制の充実 学校評価達成率80%以上	<児童・生徒>1～6年生:95% 7～9年生:92% <保護者>78%	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめ防止プログラムでは、全学年で主に4種類の調査を行い、児童・生徒の実態把握に努めている。</li> <li>・日々の取り組みの中で、正しく調査を行い、的確に判断して、個に応じた支援を行えるように、校内研修や学年組織で確認を進めていく。</li> </ul>
	いじめ予防プログラムを活用し、子どもに適切な援助希求を促し、それを確実に受け止める学校体制を構築する。	デイケン(毎日の体調・心の状態)、いじめDアンケート(毎月の実態)、NiCoLi(毎月のメンタルヘルス)、学級風土調査(年2回)を実施した。子どもの心の状態を客観的に把握すると共に、面談を通して一人一人に寄り添い、支援・指導を続けた。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		子ども一人一人の幸せを守り育てる義務教育9年間の支援体制の充実と信頼される学校の実現		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	一人一人の特性や課題に応じた相談機会と対応への満足度 学校評価達成率89%以上	<児童・生徒>1~6年生:95% 7~9年生:93% <保護者>77%	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童・生徒の満足度が高いのに対し、保護者の満足度は低い。保護者も、様々な立場の教職員に気軽に相談できるということを周知し、丁寧に対応していく必要がある。</li> <li>・学校HPについては、いつでも必要な情報がみられるよう、更新の頻度を上げていきたい。</li> </ul>
	子ども一人一人の特性の把握と子ども・保護者を対象とした相談体制を充実する。	教員だけでなく、SC、特別支援教室の専門員や訪問指導員、様々な立場の職員が関わり、子ども一人一人の特性を把握したり、相談の機会を設けたりすることができた。	B	
	学校だよりや学校HPの更新、メールによるお知らせなどの積極的な情報配信を図る。	学校HPに載せる項目を増やし、定期的に更新した。学校から保護者への通知を、一斉メールや学校HPで情報を速やかに配信した。	B	
②	不登校及び別室登校等の子ども・家庭への組織的な支援の実施 100%	学年教員や管理職とこまめに情報共有することに加え、学校情報連絡会の場を活用して全体で共有した。担任が一人で抱え込むことなく組織的な対応をすることができた。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校傾向にある児童・生徒は年々増えており、個別な対応が必要である。</li> <li>・どの機関にもつなげられない家庭もある。引き続き、面談や家庭訪問等をこまめに行い、働きかけていく。</li> </ul>
	別室登校支援員や外部機関と連携した子どもの居場所づくりの充実	別室登校やマイスクールへの登校を促したりするなど、各外部機関とも連携し、一人一人に合った居場所づくりを工夫することができた。	B	
③	特別支援に係る教育や医療的ケア等の対応を行う校内委員会を毎月1回開催する。	校内委員会を定期的開催し、情報共有をしたり支援を検討したりすることで、各教員から情報が寄せられるようになった。教員の、特別支援についての意識が高まった。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援を必要とする児童・生徒は年々増える傾向にあり、引き続き組織的に支援につなげる必要がある。</li> <li>・後期課程では外部機関から支援を受ける生徒が少ないが、担任及び各教科担当が教室内でできる支援を推進する。</li> </ul>
	特別支援コーディネーターを中心とした校内委員会を組織し、外部機関と担任、家庭を円滑に接続し、子どもの支援を行う。	外部機関につないだり、専門家から担任が助言をもらったりするなど、支援を必要とする児童・生徒が適切な支援を受けられるように環境を整えることができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成